

令和7年(2025年)9月19日

「わたSHIGA輝く国スポ・障スポ」開催記念
特別展「大名とスポーツ—武芸と遊興の祭典—」を開催します

このたび、彦根城博物館において、みだしの展覧会を開催いたしますのでお知らせします。

記

1 展覧会名称

「わたSHIGA輝く国スポ・障スポ」開催記念
特別展「大名とスポーツ—武芸と遊興の祭典—」

2 会期

令和7年(2025年)9月27日(土)～11月3日(月・祝) 会期中無休
開館時間：午前8時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

3 会場

彦根城博物館 展示室1・2

4 展示の趣旨

日本におけるスポーツのルーツは、神事や芸能、宮廷行事、武芸、遊戯など、多種多様です。時代による変遷を経て失われたものもありますが、相撲や蹴鞠、弓道など、現代もなお盛んに行われているものが多くあります。

武士が戦場において用いる技能であった弓術や馬術、剣術などの武芸は、太平の世の江戸時代においても廃れることなく、武士の必須の教養として学ばれました。江戸時代中期には、8代将軍徳川吉宗(1684～1751)が鷹狩や流鏑馬を再興するなどして特に武芸を推奨しました。一方で、実戦から遠ざかったことにより、武芸は記録や勝敗を競う競技的要素の強いものへと変化していきました。

彦根藩井伊家は代々、「武」の家であることを家風とし、武芸が奨励されてきました。藩主やその子弟も幼少期からさまざまな武芸を嗜んでおり、藩主自身が使用した馬具や弓具なども数多く伝来しています。また、藩主が藩士達による武芸を観覧する武芸上覧が行われ、藩士の子弟が学ぶ藩校ではさまざまな武芸が教授されました。

本展は、「わたSHIGA輝く国スポ・障スポ」が滋賀県で開催され、彦根も主要な競技会場となることをうけて開催するものです。井伊家伝来品を中心に、他の大名家ゆかりの品を併せて展示し、大名が形成と継承の一翼を担った現代のスポーツに通じる多様な文化を紹介します。

5 展示構成

第1章 日本スポーツの源流

第2章 大名とスポーツ

- (1) 弓術と馬術
- (2) 鷹狩
- (3) 剣術・槍術・居合術
- (4) 砲術
- (5) 武芸諸流派
- (6) 蹴鞠
- (7) 打毬だきゅう
- (8) 相撲

6 展示作品

別添リストの85件

※期間中、一部展示替を行います。詳細は作品リストを参照ください。

7 観覧料

一 般 700円(560円)

小・中学生 350円(280円) ()内は30名以上の団体割引料金

*常設展「“ほんもの”との出会い」も併せてご覧いただけます。

8 印刷物

図録

変形判(縦202mm×横210mm)・72ページ(表紙を含めて76ページ)

カラー刷り

印刷部数:1,000冊

頒布価格:1,300円

*彦根城博物館のミュージアムショップで展覧会初日(9月27日)から販売します。



図録表紙

9 関連事業

(1) 記念講演会「大名の武芸—吉宗・定信^{さだのぶ}から真田幸貫^{さなだ ゆきつら}へ—」

8代将軍徳川吉宗と、吉宗の孫にあたり、幕府老中として知られる松平定信（1758～1829）は、武芸奨励に尽力したことで知られます。彼らに加え、定信の子で武芸を奨励した名君、信濃国松代藩真田家の8代幸貫（1791～1852）を取り上げ、江戸時代の大名が取り組んだ武芸について紹介します。

日 時：令和7年(2025年)10月25日(土) 午後2時～ *90分程度

講 師：山中さゆり氏（真田宝物館 研究員）

定 員：50名

*事前申し込みは不要です。当日会場にお越しください。

*受付は、午後1時30分より開始します。

受講料：500円

*展覧会の観覧には、別途、観覧料が必要です。

場 所：彦根城博物館 講堂

(2) ギャラリートーク

日 時：令和7年(2025年)9月27日(土)午後2時～ *40分程度

講 師：当館 学芸員

参加費：無料（ただし、観覧料が必要）

場 所：彦根城博物館 展示室1・2

*開始時間に、展示室1にお集まりください。

問い合わせ先

彦根市教育委員会事務局

彦根城博物館 学芸史料課学芸係

担当：今中啓太

(電話 0749-22-6100)

特別展「大名とスポーツ—武芸と遊興の祭典—」展示作品リスト

◎…国指定重要文化財、□…県指定文化財、◇…市指定文化財

展示期間：（前期）9/27～10/15 （後期）10/16～11/3

※記載がないものは通期展示

番号	指定	名称	作者	数量	時代	所蔵	展示期間
第1章 日本のスポーツの源流							
1	□	相撲人形		1組	鎌倉時代	御上神社	
2		日本書紀 巻六	舎人親王他撰	15冊の内 第4冊	養老4年(720)成立 享和3年(1803)刊行	本館（井伊家伝来典籍）	
3	◎	騎馬武者像		1幅	南北朝時代	京都国立博物館	9/27～10/26
4		後三年合戦絵巻（模本）上巻	詞書：庭田重熙筆 絵：土佐光芳筆	3巻の内上巻	明和6年(1769)	徳川美術館	
5		平家物語絵巻 巻九（上）	土佐左助筆	36巻の内1巻	江戸時代前期	林原美術館	
6		山岡景友像		1幅	江戸時代前期	大津市歴史博物館	
7	◎	調馬・厩馬図屏風		6曲1双	桃山時代	多賀大社	前期：厩馬図 後期：調馬図
8		馬乗の芸尽図		1巻	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
第2章 大名とスポーツ							
(1) 弓術と馬術							
9	◎	井伊侯行状		1冊	江戸時代中期	本館（彦根藩井伊家文書）	
10		合弓 井伊直政所用		1張	桃山時代	本館（井伊家伝来資料）	
11		征矢 井伊直政所用		5本	桃山時代	本館（井伊家伝来資料）	
12		重藤弓		1張	江戸時代中期	本館（井伊家伝来資料）	
13		合弓 銘 大西早太	大西早太作	1張	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	前期
14		黒漆塗千段巻弓		1張	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	後期
15		弦		1本	江戸時代中期	本館（井伊家伝来資料）	
16		白革朱井桁紋弦袋		1袋	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
17		矢（騎射矢・的矢・征矢・流鏑馬矢）		6本	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
18		黒漆塗橋井桁紋雲龍蒔絵壺胡箆		1腰	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
19		黒漆塗土俵空穂		1口	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
20		弓掛・弓道具 井伊直亮所用		1式	江戸時代後期	本館（井伊家伝来資料）	
21		巻藁前矢数日記	井伊直亮筆	1冊	文政6～13年(1823～30)	本館（井伊家伝来資料）	
22		三神号		1幅	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
23	◎	弓籠手・弓掛 徳川吉宗所用		1組	江戸時代中期	東京大学史料編纂所 (江戸幕府儒官林家関係資料)	
24		白猪毛蜻蛉文逆頰箆		1腰	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
25		悪馬新当流秘伝書	平石包秀筆	50巻	享保12年(1727)	本館（井伊家伝来典籍）	
26		黒漆塗竹蒔絵鞍		1背	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
27		黒漆塗葵紋菊蒔絵鞍・同鏡	辻政也作	1背	寛文2年(1662)	本館（井伊家伝来資料）	
28		熊毛障泥		1背	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
29		十文字銜 銘 河内大掾一口藤原定次	市口定次作	1口	江戸時代後期	本館（井伊家伝来資料）	
30		黒漆塗橋紋馬柄杓		1本	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
31		朱漆塗井桁紋馬柄杓		1本	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
32		騎射笠		1頭	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
33		騎射沓		1足	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
34		黒漆塗籐巻鞭 井伊直弼所用		1本	江戸時代後期	本館（井伊家伝来資料）	
35		黒漆塗橋紋籐巻鞭		1本	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
36		柳鞭		1本	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
37		大坪本流武馬必用抜書	斎藤定易著 井伊直中写	1冊	享保2年(1717)成立 天明6年(1786)写	本館（井伊家伝来典籍）	
38	◎	側役日記		1冊	文化9年(1812)	本館（彦根藩井伊家文書）	
39		日置流雪荷派弓書	大沼優之助忠興筆	5巻	文政6年(1823)	本館（井伊家伝来典籍）	
(2) 鷹狩							
40		新修鷹経	嵯峨天皇撰	1冊	弘仁2年(811)成立 享保8年(1723)写	本館（井伊家伝来典籍）	
41		架鷹図	賛：海山元珠筆 画：初代橋本長兵衛筆	1幅	桃山～江戸時代初期	敦賀市立博物館	
42	◎	御入部御献上之雁鴨一件留書	鈴木平兵衛筆	1冊	寛政2年(1790)	本館（彦根藩井伊家文書）	
43		鷹狩道具等図解		1帖	江戸時代	本館（井伊家伝来典籍）	
44		鷹道具 鷹鞆		1枚	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	
45		鷹道具 鷹の緒		2筋	江戸時代	本館（井伊家伝来資料）	

番号	指定	名称	作者	数量	時代	所蔵	展示期間
46		鷹道具のうち 口餌籠 餌合子・餌合子覆 生物袋 水筒 鶴取大緒 架垂		1式のうち 1箇 5組 1袋 3合 2筋 2張	江戸時代	徳川美術館	前後期で入替
(3) 剣術・槍術・居合術							
47		柳生新陰流伝書「活人剣」	柳生宗冬著	1冊	寛文3年(1663)	本館(琴堂文庫)	
48		宝蔵院流槍術伝書	森川与次右衛門百親著	1冊	宝暦元年(1751)	本館(八木原太郎右衛門家文書)	
49		槍術道具		1具	江戸時代	真田宝物館	
50		薙刀 銘(表)栗田口一竿子忠綱 (裏)元禄十三年八月吉日	栗田口一竿子忠綱作	1口	元禄13年(1700)	本館(井伊家伝来資料)	
51		鍵 銘 平安城下坂		1口	江戸時代	本館(八木原俊長氏寄贈資料)	
52		木地蠟色漆塗橋紋薙刀柄		1本	江戸時代	本館(井伊家伝来資料)	
53		朱漆塗并桁紋散薙刀柄		1本	江戸時代	本館(井伊家伝来資料)	
54		木地蠟色漆塗槍柄 附 熊毛鞘		1本	江戸時代	本館(井伊家伝来資料)	
55	◎	心鏡流槍術之書	山根左五右衛門尉吉房筆	2巻	享保11年(1726)	本館(彦根藩井伊家文書)	
56		居合刀 井伊直弼所用		1口	江戸時代	本館(井伊家伝来資料)	
57	◎	七五三柔居相秘書	井伊直弼筆	2巻	安政元年(1854)	本館(彦根藩井伊家文書)	
(4) 砲術							
58		稲富流砲術伝授書	稲富一夢筆	12冊	慶長13年(1608)	本館(井伊家伝来典籍)	前期
59		橋紋金象嵌火繩銃 銘 国友藤兵衛充椒	国友藤兵衛充椒作	2挺	江戸時代後期	本館(井伊家伝来資料)	
60		米村流一貫集	稲垣弥五右衛門筆	11冊	享保15年(1730)	本館(井伊家伝来典籍)	後期
61		御入部御覧留 上	増嶋高実筆	2冊の内1冊	文化9年(1812)	本館	後期
62		ベルギー製短筒		2挺1式	19世紀	本館(井伊家伝来資料)	
63		鉄砲小道具		1組	江戸時代後期	本館(井伊家伝来資料)	
64		鉄砲中り附帳		1冊	慶応3年(1867)	本館(井伊家伝来資料)	
(5) 武芸諸流派							
65		本朝武芸小伝	日夏繁高著	5冊	享保元年(1716)	本館(琴堂文庫)	
66	◎	御代見出前書写		1冊	江戸時代中期	本館(彦根藩井伊家文書)	
(6) 蹴鞠							
67	◎	源氏物語画帖 若菜上	詞書:菊亭季宣筆 絵:土佐光吉筆	4帖の内丙帖	桃山時代	京都国立博物館	9/27~10/26
68		年中行事絵巻模本 巻三	前田萩邨筆	1巻	大正時代	京都市立芸術大学芸術資料館	
69		桃色地金松葉菊の丸文様鞠水干		1領	文化10年(1813)	京都国立博物館	後期
70		紅地鞠袴		1腰	嘉永6年(1853)	京都国立博物館	後期
71		鞠・黒漆塗巴上り藤紋散蒔絵鞠挟		1組	江戸時代中期~後期	サントリー美術館	前期
72	◇	栗色地丸龍文様鞠水干・紫下濃鞠袴		1式	江戸時代後期	個人(沓掛家蹴鞠資料)	前期
73		松に日月文様鞠扇		1握	江戸時代	真田宝物館	
74		鞠沓		1足	江戸時代	真田宝物館	
75		木地六連銭雁金紋蒔絵鞠台		1台	江戸時代	真田宝物館	
76		鞠	坂井喜三郎作	1丸	昭和9年(1934)	京都国立博物館	後期
77		和歌懐紙「鞠の庭に…」	飛鳥井雅威筆	2幅1対の内1幅	江戸時代中期	本館(井伊家伝来資料)	
78	◎	蹴鞠免状写		1状	江戸時代中期	本館(彦根藩井伊家文書)	
79		蹴鞠座組帳		2冊の内1冊	江戸時代後期	本館(井伊家伝来典籍)	
80		蹴鞠百首和歌	飛鳥井雅康著	1冊	江戸時代	本館(井伊家伝来典籍)	
(7) 打毬							
81		打毬具		1式	江戸時代後期	徳川美術館	
82		馬飼馴らし絵巻		1巻	江戸時代後期	個人	
83		打毬之巻	真田幸貫筆	1巻	文化6年(1809)	真田宝物館	
84		三居満以書状 三居満貞宛	三居満以筆	1通	弘化3年(1846)	個人(三居孫大夫家文書)	
(8) 相撲							
85		化粧まわし 井伊直亮奉納		4腰	江戸時代後期	日撫神社	

写真解説

*番号は作品リストの番号と一致します。

- 3 ^{きばむしやぞう} 騎馬武者像 1幅 *展示期間：9月27日～10月26日
重要文化財
縦99.9cm 横53.2cm
南北朝時代
京都国立博物館蔵

黒毛馬に乗る武者の肖像。細密かつ動感にあふれた表現で、騎馬肖像画の中でも高い完成度を誇ります。描かれた武者は、固く結んだ口元、大きな鋭い目など、気迫に満ちた表情です。同時代の武者像の多くは、24本揃いの矢を携えています。本作は6本で、このうち1本が折れています。また、抜き身の太刀を担ぎ、^{もどり}髻が解けて乱れた髪形であることから、激戦の渦中の姿とされます。

画面上部の花押は、室町幕府第2代将軍・足利義詮^{よしあきら}（1330～67）のものとされます。像主は、古くから足利尊氏^{たかうじ}（1305～58）とされてきましたが、現在は、^{こうのもろなお}高師直（？～1351）、あるいは、^{もろあきら}その子師詮（？～1353）とする説も提示されています。

*京都国立博物館から提供された画像です。掲載の際はその旨を明記ください。



- 12 ^{しげどうのゆみ} 重籐弓 1張 ^{はり}
全長212.4cm
江戸時代中期
本館蔵（井伊家伝来資料）

武家は「弓馬の家」とも呼ばれたように、古くから弓術と馬術は武家の必須の技術でした。弓矢は戦闘の道具として古い歴史がありますが、年中行事や祭礼などの儀礼で威儀を整える道具として用いられることもあり、それぞれの用途に応じた多種多様な弓と矢が用いられてきました。

^{しげどうのゆみ}重籐弓とは、竹と木の2種類の素材を用いた弓が割れたり折れたりすることを防ぐため、^{とう}籐や^{つづらふじ}防己、^{かば}樺の類を要所に巻いた弓です。籐の巻き方にも見た目の美しさが重視されて趣向が凝らされ、さまざまなバリエーションが生まれました。弓の中でも格式が高く、武威の象徴とされ、主に大将クラスの武将が用いたと言われ、後には儀式でも用いられるようになりました。

本作は、享保10年（1725）、井伊家7代直惟^{なおのぶ}（1700～36）が、後の9代将軍徳川家重^{いえしげ}（1711～61）の元服の加冠役をつとめる際に作られた弓です。



23 弓籠手・弓掛 徳川吉宗所用 1組

重要文化財

弓籠手桁69.7cm

江戸時代中期

東京大学史料編纂所蔵（江戸幕府儒官林家関係資料）

8代将軍徳川吉宗（1684～1751）所用の弓術道具。弓籠手は、弓を射る際に衣の袖が弦に当たるのを防ぐために、肩から左手にかけて覆う籠手。弓掛は、弦を引く右手を保護する革製の手袋。この弓掛は親指のみを覆う形のものです。

享保の改革で知られる吉宗は、泰平の世が続いたことで緩んでいた武家の士気を引き締めるため、特に武芸を奨励しています。幕臣による武芸上覧を頻繁に行ったほか、鷹狩や流鏑馬といった、当時、すでに廃れていた武芸の復興などにも尽力しました。吉宗自身も元来武芸を好み、将軍となる以前、紀州藩主であった若い頃から積極的に武芸に励みました。

本品は、代々、江戸幕府に儒官（儒学を教授する役人）として仕えた、林家に伝来した資料の一つ。



※東京大学史料編纂所から提供された画像です。掲載の際はその旨を明記ください。

25 悪馬新当流秘伝書 50巻

平石包秀 筆

縦17.8cm 横82.7cm

江戸時代 享保12年（1727）

本館蔵（井伊家伝来典籍）

井伊家の御家流であった悪馬新当流の秘伝書。悪馬新当流の祖、神尾織部吉久（？～1625）は、井伊家2代直孝（1590～1659）に召し出された馬術家。いかなる悪馬をも自在に乗りこなす術を駆使することから、悪馬新当流と呼ばれました。同流は、水戸藩や福井藩、尾張藩などでも盛んに行われ、江戸時代の馬術流派の中でも有力な一派でした。

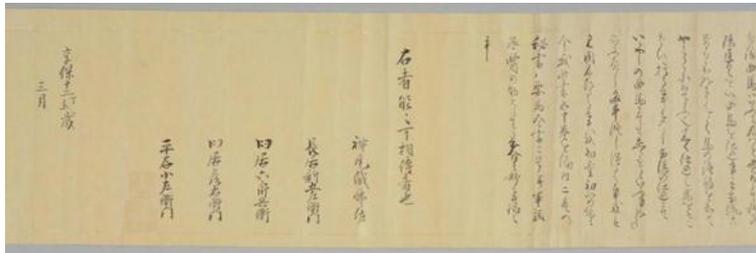
本書は、織部の慶長13年（1608）の著述をもとに、彦根藩士で、悪馬新当流の流れをくむ平石包秀が50巻に編纂した馬術書。本書は、平石によって、享保12年（1727）、熱心に馬術に取り組んだ井伊直定（1702～60、当時彦根新田藩主で後の8代当主）に奉呈されました。



全体



冒頭



巻末

56 ^{い あいがたな} 居合刀 ^{い い なおすけしよ} 井伊直弼所用 ^{ふり} 1口

刃長78.8cm

江戸時代

本館蔵（井伊家伝来資料）

井伊家^{なおすけ}13代直弼（1815～60）所用と伝える居合刀。乱刃の刃文が目を引く作で、地には板目や杢目などの文様、飛び焼きが入ります。制作者は不明ですが、反りが弱く、大きめの^{きつさき}鋒を持つ姿などから幕末期の制作と考えられます。

彦根藩では早くから、^{しんしんりゅう}新心流の居合術が取り入れられました。新心流は、江戸時代初期に大成された、心の修養を主とした抜刀術です。直弼は、庶子時代に藩の居合師範を務めた河西精八郎充信からこれを学んで^{けんざん}研鑽に努め、天保6年（1835）、21歳で「^{しんしんりゅう}神心流」という一派を新たに開き、これに関する著作を著しました。そして、安政元年（1854）には「^{しちごさんやわらい あいひしよ}七五三柔居相秘書」（作品57）を著し、河西精八郎の息子に授けています。秘書には、単なる技術的な鍛錬ではなく、武士としての精神性に重きを置く直弼の姿勢が示されています。



71 ^{まり}鞠・^{くろうるしぬりともえのぼ}黒漆塗巴上り藤紋散蒔絵鞠挟 ^{ふじもんちらしまきえ まりばさみ} 1組 *前期（9月27日～10月15日）展示

鞠 径17.5cm

鞠挟 幅30.0cm 奥12.0cm 高32.0cm

江戸時代中期～後期

サントリー美術館蔵

^{けまり}蹴鞠は、革製の鞠を、地上に落とさないように交互に蹴り続け、その回数を競う球技です。奈良時代以来、貴族の遊戯として愛好されただけでなく、中世以降、武家の^{たしな}嗜みともされ、江戸時代の大家でも盛んに行われました。

本作は、蹴鞠用の鞠と、これを吊るす^{まりばさみ}鞠挟。鞠挟は、黒漆塗に金蒔絵で右巴紋と上り藤紋を散らします。鞠を挟む円形の枠には、金地に金銀の蒔絵で繊細な菊唐草文様を描き、金具は銀製です。蹴鞠の鞠は実際に使用するだけでなく、飾りとしても用いられました。本作はその一例ですが、このような形状の鞠挟は他に例がありません。伝来は不明ですが、2種類の紋を散らす装飾や細部まで手の行き届いた作りからみて、大家の調度であった可能性も考えられます。



※サントリー美術館から提供された画像です。掲載の際はその旨を明記ください。

85 ^{けししょう}化粧まわし ^{い いなおあきほうのう}井伊直亮奉納 4腰

幅約61.5cm 長約399cm 他

江戸時代後期

^{ひなで}日撫神社蔵

相撲は、古来、日本で行われてきた競技です。平安時代には儀式的な要素の強いものでしたが、鎌倉時代以降、儀式の要素も残しつつ、より実質的な技を競うものとなりました。さらに職業力士も登場し、江戸時代には將軍の相撲上覧が行われて幕府公認の娯楽となり、全盛期を迎えます。また、大名の中には、有力な力士を召し抱える者もありました。

本作は、彦根藩領であった日撫神社（現在の滋賀県米原市^{ごうど}顔戸）に伝来した、儀礼用の化粧まわしです。弘化年間（1844～48）に井伊家12代直亮（1794～1850）が奉納したと伝えます。紫、赤、朱、草色の緞子や綸子織の豪華に仕立てた華麗な品です。同社では、毎年9月15日の秋祭りで相撲と角力踊りが奉納されており、これは、後鳥羽上皇参詣の際に村人たちが相撲を披露したのが始まりと伝えます。このまわしは、近年まで角力踊りで用いられていたもので、井伊家と相撲との関わりをうかがわせる貴重な作例です。

